



# げっぺいさい 月餅祭

教会機関誌

ローリー・フラー・ソーサ

(ほんとうにあったお話をもとに書かれました)

「わたしはあなたがたをすてて孤児とはしない。あなたがたのところに帰って来る。」(ヨハネ 14:18)

「あまり先まで走って行っちゃだめだよ!」お父さんが大きな声で言いました。「暗くなってきてるから、転んじゃうよ。」「月餅はなくなったりしないよ。」お父さんはお母さんと一緒にビンセントに追いついて、そう言いました。「少なくとも、ビンセントが行くまでは大丈夫さ。」

公園に近づくにつれ、ビンセントの耳にたいこの音が聞こえてきました。木には色とりどりのちょうちんがぶら下がり、夜のやみを明るく照らしています。家族連れがシートの上で何か食べながら、みんなで満月をながめる時を待っています。

お母さんが空いている場所を見つけて、しばふの上にシートを広げました。お母さんはビンセントに、食べ物を買うためのおこづかいをわたします。

「ありがとう!」ビンセントは待ち切れずにたんけんに出かけました。歩きながらコインを数えます。20リングット! これならちゃんと月餅が買えます。だけど、何の味にしようかな。ハムかな。たまごもいいし。それともドリアン? ビンセントは結局、黒ごまペーストがたっぷり入ったものを選びました。食べながら、屋台を次々とのぞいて、いろんな食べ物を見て回ります。くしに鳥肉をたくさんさしたもの。大きななべには、スパイ

スのきいたスープとめん。かき氷にアイスのをのせたものを、残りのおこづかいで買おうかな!

やがてビンセントは、あまりちょうちんがぶら下がっていない場所に入りました。あたりが暗くなって、ビンセントはあることを思いつきます。

目をとじたまま、どのくらい遠くまで歩けるかな。ビンセントは目をとじて、足を一歩ふみ出します。もう一歩。もう一歩、と出した足が、何かに引っかかりました。たおれる!

いたい! ビンセントのあごが、何か固いものにぶつかりました。それは、金属でできた大きな排水溝のふたでした。手をのばして、あごにさわってみます。血が出ていました。

「お父さん?」「お母さん?」ビンセントは大きな声でよびました。急いでちょうちんがある方へもどると、そこにいた人がお父さんとお母さんを見つけるのを手伝ってくれました。

「心配してたのよ!」お母さんが言いました。そして、ビンセントの顔を見ると、「病院に行かない」と言いました。

それからもなく、ビンセントはお母さんとお父さんと一緒に、病院の待合室にすわっていました。ビンセントはとてもおびえていました。ほくは良くなる

だろうか。

ビンセントは両腕をぎゅっと組んで、イエス様のことを考えました。ビンセントの家族は、何か月か前にバプテスマを受けたところでした。宣教師は、イエス様はほくをなぐさめてくださると言っていました。

イエス・キリストがぼくを助けてくださる。イエス・キリストが助けてくださる。何度も何度も、ビンセントはそう考えました。すると、ビンセントはほんとうに少し落ち着いてきました。せいいがとなりになってくださっているように感じました。

お父さんがビンセントの手をぎゅっとにぎりました。「何とかなるからね。」お母さんが言いました。

ビンセントはうなずきました。お母さんの言っていることは正しいと、分かっていました。

お医者さんが来て、ビンセントのあごをぬいました。いたかったけれど、がまんできないほどではありませんでした。お医者さんはビンセントに、きずあとが残るだろうと言いました。けれど、ビンセントは気にしませんでした。そのきずを見るたびに、ビンセントは月餅のこと、お祭りのこと、イエス様とせいいになぐさめられたときのことを思い出すでしょう。●

このお話の舞台はマレーシアです。次の記事を読んで、マレーシアについて学びましょう!

